

公益財団法人日米医学医療交流財団 留学助成

研修報告書 (2019年度 助成者)

作成日 2019年 8月 20日

氏名 (フリガナ)	青山 徹(アオヤマ トオル)
研修先機関名	Hawaii Tokai International College
研修期間	2019年8月12日 (月) ~ 8月17日 (土)
大学名	慶應義塾大学
学年	5年

この度は公益財団法人日米医学医療交流財団「2019年度医学部夏期集中医学英語研修プログラム」への参加を受け入れて頂きましたことに感謝申し上げます。僕はプログラムへの参加動機として、異文化における医療を学び将来のキャリアを考えるための土台を固めることを目標に掲げておりました。以下に実際の研修の様子やプログラムを通じて感じたことを述べます。

5日間の具体的な研修内容は、(1)History Taking/Case Presentation 等に関するワークショップ、(2)現地の病院や大学の訪問、(3)ハワイ大学医学部(JABSOM)の学生を模擬患者とした PBL、(4)現地で働く日本人医師による講演の4種類に大きく分けられました。(1)では家庭医療が専門の Dr. Shon から PBL 形式で History Taking のいろはや Case Presentation の基本を学び、Queen's Medical Center で Hospitalist として働く Dr. Nogi から網羅的な質問の仕方や効果的なプレゼンの表現方法を学びました。(2)では Honolulu 市内にある Kuakini Hospital で Sleep Center や ICU 病棟を訪問し、内科医の Dr. Kobayashi が経営する St. Luke's Clinic でオフィスや診療室の様子を見学しました。(3)では JABSOM の1-2年生が模擬患者役となり History Taking や Case Presentation を実践形式で繰り返し練習し、様々な先生方から直にフィードバックを頂きました。(4)では実際に渡米して米国で医師として働く先生方から、臨床留学を行う上での難しさや米国で働くことの実情など多岐に渡るお話を伺いました。

プログラムの感想は「内容が濃い」の一言に尽きます。米国で医師として働くことを志す以上、History Taking と Case Presentation の能力は非常に重要な意味を持ちます。レジデントとして希望の病院で採用されるために、米国の医学生はこの2つの能力を入学時から繰り返し練習するそうです。このことを意識したプログラム構成のため、5日間はひたすら病歴聴取と症例報告のスキルを身につけることに主眼が置かれ、基礎から一通りのことを頭に叩き込み実践して身体で覚えるという内容でした。短期間で集中的に数をこなす即座にフィードバックを得るといった経験は初めてのため、たった5日間ですが自分の実力の伸びを実感しました。日本でこれらを意識的に教わったことはなく、将来の臨床留学に向けた基盤作りという観点でプログラムの意義は大きいと感じました。また JABSOM の学生達から医学部の大変さや学習のモチベーションなどを聞いたことや、米国で働く日本人医師から聞いたお話は非常に貴重でした。日本での研修と渡米のタイミング、USMLE の受験勉強とスコアの重要性、米国でのマッチングの難しさや日米での医療の違い、先生方の渡米理由と苦労話など、留学を志す僕達が知りたい生の声を伺うことができました。しかし今回の一番の収穫は、臨床留学を目指し僕と同様にプログラムに参加した医学生の仲間達と知り合えたことだと思います。5日間で見聞きした様々な経験から、僕の中では留学への思いが強まる一方で困難も大きいのだろうと感じ、米国で医師として働くということが一歩近づき二歩遠ざかった様な複雑な心境です。自分は何故留学を目指しているのか、異文化で育った患者やコメディカルと働くとはどういうことか、今後の進路はどうするか、色々な疑問や考えが混じり合っています。ぼんやりとしていた臨床留学の夢が少しずつ具体的になり、今は不安を感じるけれど確実に今後の人生の原動力になるのだろうとも感じています。5日間得たものはとても多く、この経験を糧に将来の夢への歩を進めていく所存です。

最後になりますが、本研修へのご支援を賜りましたことにつきまして、小玉正智先生、日米医学医療交流財団の皆様、HTIC の皆様、Dr. Shon を始めプログラムを支えて下さった先生方に感謝申し上げます。